

マーフィーの法則を用いた、環境の認識手法の改善

The Use of MURPHY'S LAW in the Sympojium

平松 登志樹*

Toshiki Hiramatsu

ABSTRACT ; The study indicates the use of MURPHY'S LAW on the Environmental topic in the symposium. The presenters must show their LAWS to the audience in the screen. The audience can also state their own LAWS in the screen easily, because presenters' LAWS and the debate are easy to understand.

KEYWORDS; MURPHY'S LAW, Sympojium

1.はじめに

最近、環境教育をもくろむ集団または個人（環境教育主体）が乱立している。環境問題に関する行動、考えを押しつける。意見を述べる場は、日常の会話の場から、地球環境のシンポジウムまで、多くある。豊かな社会に向けての、社会の動きという認識は正しいか？私は、現在の意見交換は、時間の無駄と思う。本稿では、環境の認識手法の改善を提案し、シンポジウム等の討論会において、議論が有意義におこなわれる仕組みを模索する。

2.討論会の現状

2-1 参加の意思喪失

環境問題、特に地球環境問題は、我々の生活と密接にかかわる。地域の問題となるのは仕方がない。しかし、環境という言葉から、例えば、人口、人工物、都市、高齢者、身障者問題へと飛び火し、何が話されたのか、結局さっぱりわからない。議論がかみあわないので、聴衆は、参加の意思が失せる。

2-2 リストラ（restructuring）の期待はずれ

研究分野でもリストラは必要であり、ノウハウの改善と専門分野の再構成が期待される。社会のきびしい審査が必要であって、専門家が同じ土俵の上に乗り、環境問題に関するシンポジウムは、起爆剤の

はずである。大学院大学構想の今の再編成は、名称の似た類別の中だけのリストラで、全く意味がない。従来の類別が保持されるからだ。

ところが討論会にしても、効果がない。環境教育主体の議論がかみあわない。環境というテーマである以上、誰でも自分の得意な分野について、とくとくと、述べればよい。環境に関する意見を述べた本も実に多い。大家の先生のお言葉を、持ち出す場合もある。弱点をつかれても、各自いごこちのよい空間に逃げ込めばよい。その空間は、環境という言葉と、専門家の概念、あるいは専門分野という名前で見守られる。議論は、些細な、表層の矛盾の指摘による勝負となり、結局引き分けとなる。

社会のノウハウの改善もなく、リストラもなく、再び専門は、いごこちのよい空間に帰還する。専門の暗く閉鎖的な蟻地獄の穴である。

歴史的にみても、今の日本は、余剰が多く、リストラの対象でも死活問題までは発展しない。大きなチャンスなのに、大変残念である。



図-1 蟻地獄の穴への帰還

* 豊橋技術科学大学 Toyohashi University of Technology

2-3 無意味な討論の結末

討論をまとめる場合がある。形の上の合意形成が必要な場合にも、環境や大家（専門家）の言葉、イメージが利用される。例えば、「みんなで環境を考えようね」「世界的権威の先生のお言葉の含みには、あなたの考えも内包される」である。

教育が必要という結末にもなりがちである。議論に不参加の人の批判であって、卑怯である。住民参加と環境の保全・制御という節において、盛岡¹は、身近な環境づくりのソフトなしくみとしかけを考案している。環境問題のシンポジウムについては、地域環境に密着したテーマを選ぶことを記述する。なるべく多くの市民が参加する企画が望まれる。しかし、多くの人が参加しても、「みんなで環境を考えようね」「あなたの考えも内包される」「教育が必要」という結末になったら、全く意味がない。なんとなく、一瞬わかったような気持ちになる人もいるが、結局、何も改善しない。

3. 環境の認識とその改善

意味のある討論会の仕組みを考える前に、認識すべきことがある。それは、環境の認識は、不完全²なことである。誰のとりえかたが特別に優れており、誰が劣るというものでないとする。人の環境観は、多様で、つかみにくいことも異論はなからう。

次に認識改善の特徴をいう。少しづつの改善が望まれる。認識の改善には、異物とのぶつかり合いが重要なので、シンポジウム等、異質の人と議論すること自体は意味がある。「否定の否定」の法則³の適用の契機となる。しかし通常の討論会では、反証の対象をとらえていない。環境という概念、大家のお言葉、言外への余韻、イメージ等が障害となる。やり方を変える必要がある。

4. マーフィーの法則を用いた、環境の認識手法の改善

4-1 マーフィーの法則

環境のような漠然とした対象について議論する時には、自分の意見を端的に表現することが必要不可欠である。その時極めて有効なものがマーフィーの法則⁴である。アメリカ、カリフォルニア空軍基地で働いていた、信頼厚いエンジニア、エドワード・アロイシャス・マーフィーJrという人の名前から、マーフィーとつけられたという。1949年テスト飛

行中、重力測定装置の異常が発生した。誰かが、セッティングの仕方を間違えたことが原因とわかったが、マーフィーJrは「いくつかの方法があって、一つが悲惨な結果に終わる方法であるとき、人はそれを選ぶ」といった。悲観的な見方をするより、誰でも失敗するから、めげずにがんばりましょうという具合に捉えたほうがよい。我々は環境の認識が不完全なままで、行動するので、失敗することもあるさ。みんなで、少しずつ改善していきましょう。と応用することができる。

4-2 マーフィーの法則の利点

利点は3つあると考えた。1つは、生活に根ざした法則である。わかりやすいから、K.J.法のように言葉のイメージの差の影響、障害も少なく、まとめやすい。2つめは、新鮮な法則ということである。通常の法則にしたがわない、新鮮な事象が表現される。感動も表現できる。3つめは、多くの人が、各自の興味の対象に対し、気軽につくれるし、実際つくっている法則である。ゴルフ篇もできている⁵。投書によって本⁶ができる。法則という形で表現して楽しむ人がいる証拠である。類似の本^{7,8}では、読者からの法則を募集している。不幸な事態を、楽観的にみなおし、前向きの解決策を考え出そうとする気運が好まれる。

ありふれた法則ばかりだったとしても、その一つ一つは重要である。環境に関する討論会の中では、聴衆は、パネリストから提示される難解な概念を、一瞬、理解したような気になる場合がある。しかし、自分の、日頃なじんでいる感覚とぶつけてみるのがなかなかできないので、シンポジウムが終わった後には、難解な概念を、すっかり忘れてしまう。無毒の蟻地獄の中に、ひきこまれただけである。「本当だ。やっぱりこう感じる」という陳腐な法則は、難解で内容のない言葉が述べられた途端に、光り、効力を発揮する。眉間にしわをよせて「こうしろ」とせまってくるような内容のない概念を吹き飛ばす。正常なパネリストなら、議論相手のマーフィーの法則を見れば、その人の悩みや苦しみも感じ取れるので、有益な意見が生まれるだろう。

社会の様々な問題に関し、かたよった議論が、テレビ等の討論会でなされておれば、国民は法則に絵等をそえて、送るかもしれない。痛い部分を、ちく

ちくつきながらも、「どうですか、いっぱい」と語りかけるような雰囲気、マーフィーにはある。

5. 法則を活用した討論会

概念図を図-2に示す。主体の境界線の一部が点線になっている点に注目する。



図-2 改善された討論会

5-1 マーフィーの法則の提示

パネリストは、法則を用意する。開催広告にものせる。乱立する環境教育主体は、自分の殻の中のエキスを、法則にして表現してみろといたい。並べてみたら、面白い。案外、似た、くだらないものが多いかもしれない。一言で語れるかと反論する者は、リストラの対象である。高学歴社会に通用しない。豊かな社会の夢の実現に、使えない人材である。シンポジウムの開催自体が意味がないこともあるだろう。テレビの討論会にも適用できる。

私が、今まで、参加した、あるいはテレビ、授業で見聞きした意見をもとに、マーフィーの法則に集約した。appendixに示す。行政、研究者、自然保護運動家の主体は、よく、シンポジウムで登場する主体である。

もっとよい表現もあるかもしれない。法則の改善があれば、是非教えていただきたい。もしなければ、この表を社会の基礎的な法則集として、必ずシンポジウムのディスプレイにのせてもらう。パネリストのオリジナルの法則の違いを明らかにできた上で、討論会を開催してほしい。

5-2 議論の仕方

聴衆は、各パネリストの提示した法則を、大きなスクリーンにみる。(基礎的な法則集は、みくらべやすいように別のディスプレイに表示してほしい。)さて、議論したくなるような、新鮮なものがあったとする。聴衆は、興味を感じればすぐ法則をつくりだす。批判、支援、もっとユーモアのあるもの、統合的なものも次々に、つくってスクリーンに、のせられるようにする。そして、パネリスト、聴衆の議論が再び始まる。最後に生き残った法則を、そ

のシンポジウムの成果と考えればよいだろう。法則が悲観的なものだったら、なんとかする具体的な方法をみんなで考えよう。

5-3 ゲーム感覚のデバート

ゲーム感覚の議論は、生身のぶつかりあいほど強烈ではない。環境の認識改善には、当然、生身のぶつかりあいの方が有効だろう。しかし心理、肉体面での負荷は大変で、とても疲れる。現在、学際的、総合科目、統合化という言葉が、地球環境と同じくらいもてはやされる。しかし、上の言葉でかたづけられるほど、共同研究は、なまやさしいものでない。

しかし、ゲーム感覚であっても、お互い刺激を求めて、ぶつかりあって、エキスをだしあうような展開になったら、望ましい。各専門分野の知恵が集集でき、細分化した専門分野のリストラにもつながる。マーフィーの法則のユーモアさは、触媒となりうる。より豊かな法則、あるいは仮説も作られる。例えば、大きな買い物や研究してきた人にとって「小さな財ほど、家の中の時空間を占める」等の仮説は、刺激的だろう。十分学術研究の仮説にも成りうる。

皮肉な結果も笑い飛ばすことができ、なんとかやろうとする気にさせる。中味がなく難しい顔や、概念という害毒を一掃できる。

5-4 昔話の創作

学習の発展形も考えられる。自分の、社会への夢をもちこんだ、昔話の創作である。社会システムデザインのコンセプトは、このお話しの統合である。数多くの、きらめく法則をおりまぜて、昔話をつくる。将来の豊かな社会を夢想し、その時点から今の生活を振り返った時の、お話を創作するのである。昔話の研究目的は、切り捨てられた地点情報の獲得⁹だけでない。新たに創造してもよい。このようなデザインが、文章や絵で、住民側から提案され、行政は、その料理に悲鳴をあげるという社会になってほしいと考える。豊かな社会は、各自が社会への夢を語ることなしに形成されない。

6. まとめ

以上、私の意見を述べた。当然、今の私の認識も完全ではないだろう。私も自然なので、これを書いた後には、がらっと違うことをいうかもしれない。なぜなら、私も自然である。マーフィーの法則4によれば、母なる自然は性悪女だからである。

参考文献

1. 盛岡 通、,都市と環境 現状と対策、編者代表、中村英夫、第6章8節、ぎょうせい、pp.423 429,1992
2. エコダイナミックス、ポールディング、SAGE,1978
3. 哲学辞典、平凡社、p587,1987
4. マーフィーの法則、アーサー・ブロック著、倉骨 彰訳、アスキー出版局、1994
5. マーフィーの法則、ゴルフ篇、エド・ウエスト 著、日本マーフィー普及会監訳、アスキー出版局、1994
6. 続マーフィーの法則、アスキー出版局、1994
7. 医療の大法則、メディカルバンク編、アドア出版、1994
8. ジャパニーズの法則、コルゲート大学日本研究会 編、ジャパン・ミックス、1994
9. 竹林幹雄、東 徹、田名部 淳、伝説に現われる空間把握に関する基礎的研究、日本都市計画学会論文集、No.28,pp.589 594

APPENDIX

自然の法則

- ・マーフィーの法則によれば、「母なる自然は性悪女」である。したがって、お金のかからない、安全な川は、その輝きをほとんど失うのだ。

自然保護運動家の法則

- ・自然保護団体のよりどころとする、大家の先生のお言葉ほど、あくびの出るものはない。
- ・自然保護運動家は、自然に人間がいじめられることを望む。
- ・「住民の意見が計画に反映されないのはおかしいという」人が、りきめばりきむほど意見は無視される。
- ・住民の環境教育が必要という人ほど、教育の必要がある。
- ・自然保護団体は都市にあつまる。
- ・動物愛護を公に語る人ほど、本来の動物の性格を無視した過剰愛護者になる。
- ・環境保護も人間の欲の前には無に等しい。

- ・自然を守るためには人類がほろびるしかない。
- ・自然を守っていると思っているひとは必ず自然をこわしている。
- ・自然は人間のためにあると思っているひとは自然につかわれている。

役人の法則

- ・住民のレベルは高くない。自然保護のお方の意見は特殊である。
- ・自然保護のお方の意見は、一般的である。
- ・他人のレベルが高くないと考える人ほど、自分のレベルは低い
- ・つくったものは必ず、社会がつかってくれると信じている。
- ・苦労して英知を結集してつくった人工物には、見向きもしない。
- ・皆様になるべく安く供給しようとした公共財は、やすく軽くみられる
- ・環境という言葉を使う人が、環境の問題の元凶である。
- ・水量の確保の便益を評価すればするほど、ダム開発にむずびつき、大量、安価の供給に向かう。
- ・水のたりなさを語るほど、工業用水がだぶつく。
- ・ダム操作の重要性をかたるほど、実際水があまっていると認識される。
- ・つくればつくるほど軽んじられる。
- ・税金の範囲でやれば軽くみられる。
- ・安全性を高めれば無視される。
- ・安全な川に、さんしょううおをすませる。
- ・苦労して水を確保。調整できれば足りなくはない。
- ・住民は環境アセスメントで数値目標を明示せよというが、数値目標で提示できないものの考察ほど重要なものはない。
- ・研究者は、計画を決めるには、科学的根拠を拠り所にしなければならないというだろうが、科学は不完全である。科学以外のものが重要な要素となる。
- ・環境対策をすると新たに問題が出る。
- ・否定してもいつまでも疑われる
- ・いっぺん作ったら終りというインフラはない。
- ・コスト最小主義は、悲観的な認識をもたらすだけ

でなく、実際のハードを貧弱なものにする。

- ・便益の値は、あいまいだ。しかし、曖昧さも十分包容する夢は語られる。

大学の法則

- ・学科、学部名に環境をつけると必ず人気が出る。
(学生が集まる)
- ・完全な準備は失敗を生む。
- ・授業中、学生がねむそうだから先生が「ねていい」というとねむくなくなる。
- ・授業中で教官にきかせようと、しゃべる内容ほど、教官は無視するものはない。
- ・ぶちぶちいう学生ほど、ストレスがたまる。
- ・バスの中で教官に、わざときかせようと、しゃべる内容ほど、教官は無視する。
- ・話してもどうせわからないだろうと思う人の考えほど、レベルの低いものはない。
- ・環境認識への関心がない生徒ほど、生き生きしている。

研究者の法則

- ・研究者は例外を排除しつつ、定理を積み重ね論文を書き続ける。論理構築の綻びは、マーフィーの法則の無視であり、最後に、いびつな結論が導かれる。
- ・研究者は、自分の本音(マーフィー)を押し殺し、勉強する。勉強の成果が認められた人が、成果と無関係のあるいは、正反対のことを主張しだす。
- ・締め切りぎりぎりになるまで仕事をしない人は、必ずかじばの馬鹿力を強調する。
- ・地球のためにしたことがかえってあだになってかえってくる。
- ・「環境について話しとると、自分自身わけがわからんようなことになってますが、それはいつもあることで。」というひとほど正直だ。
- ・福祉にどれくらいのお金があるんですかという答えに、はっきり答えられる人ほど、その計算のやり方は雑である。いいかげんである。
- ・難しい言葉を使って相手を黙らせた人は、必ず相手に理解されていない裏切られる。
- ・自分の名前のある論文を多く公表することは、自分の無知を広めることである

- ・論文の法則。いったんつくったら、つくった本人は、もう、みるきがしなくなる
- ・やればやるほどだめになる。

社会(住民)の法則

- ・安いのが最悪
- ・公共料金値上げに反対する人は、必ず、エネルギー多使用型である。
- ・生活資料は等差数列、人口は等比数列の増加
(マルサス人口論)
- ・慈善は最悪の状況をもたらす(マルサス人口論)
- ・精根こめてつくしたらすてられる。
- ・精根こめてつくった料理が失敗する。
- ・類別が混乱をもたらす。(野口の超整理法)
- ・感情のもつれたあぐく相手を罵倒する言葉は、双方とも使いたい言葉だ。
- ・一番最初に市場に新製品をおくりだした会社はつぶれる(マーケティングサイエンス)
- ・知っていてももらいたいと考えることほど、他人にはどうでもよい
- ・他人の矛盾を責める人ほど、自分は大きな矛盾がある
- ・性悪がいなければ、利用の価値がつかめない。
- ・雨が降ればバスはありがたい
- ・洪水がおきた地域の情報がみえれば、いんふらのありがたみがわかる。
- ・日本の首相が外国で、各国の報道員の質問を受ける場には、必ず日本の報道員が多く、必ず日本の報道員が多く質問する。
- ・モラルという言葉を使う人ほど、モラルの向上が必要。
- ・環境教育をやりたいがる人ほど、学ばなければならない。
- ・子供をてなづけることほど、難しいことはない。
- ・子供ほど性悪なものはいない
- ・環境教育の議論に参加する人は、一瞬わかったような気になるが、すぐ忘れてしまう。
- ・社会のためという名目によって、自分の好きな空間が変えられてしまう。
- ・CMで美しい自然を流している商品は、環境破壊をしていることがおおい。

学生の法則

- ・ほしいものがあるときは、いつも金がない時だ
- ・自動販売機は2本も飲みたくないときに限って当たる。
- ・安いシャープペンの方より高いシャープペンの方が早くつぶれる。
- ・UFOを信じないひとほど幽霊を信じる
- ・若者の行動にくちうるさい中年ほどたちょんをする。
- ・こむつかしい文章ほど内容はあさい。
- ・すごいことをしたと思う人ほど、他人から見ればたいしたことない。
- ・地球にやさしくは人間が使う言葉でない。
- ・「この紙は、再生紙を使用しています」と表示するインクの無駄には目を向けない。
- ・署名はおもったほど効果がない。
- ・国の総来を心配する投稿をするひとほど、心配すべき将来とはまったく無関係である。
- ・国際的大事件がおきるとき、そこにはノストラダマスがいる。
- ・自然保護団体のよりどころとする、大家の先生の認知度は、その大先生の言葉の認知度とほぼ等しい。
- ・人は避暑地へいって、自分の言えに帰ってくるとクーラーをつけて「やっぱり自分の家が一番」という。
- ・環境に関するレポート課題を出すと、必ず、「一人一人が考えなければならない」、「やれることからやらなければならない」という、理由のわからない、主語や目的語のない最悪の文章が現われる。

としきの法則：

- ・人は、人が関係しない山の水を望むのではなくて、草木、虫魚、人工、そして人間のまざりあう、醸造された水を好む。
- ・マンダラは、性悪女と利用の便益がおりかさなる図柄である。
- ・現在の昔話は、将来の世界を想定し、その世界から現在をながめた話である。
- ・昔話は性悪女である。
- ・努力は時間の無駄。